

「収穫の秋」

「私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でもなく水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。」

(聖書協会協同訳) Iコリント3：6～7

秋も深まり、紅葉が美しい季節ですね。盛岡から管理教会へ移動する車窓から見える秋の紅葉に本当に美しく心が癒されます。

11月に入りました。教会では今年1年間に神様から与えられた多くの恵みに感謝し、また収穫の実りに感謝するという意味で「収穫感謝祭」が行われます。欧米でも「サンクス・ギビングデー」は大切な日として考えられています。

アポロとパウロは、2人ともキリストの教えを人々に伝えるために情熱をかけて生きた偉大な人物ですが、人々は彼らこそがキリストだと言わんばかりに「わたしはパウロにつく」とか「わたしはアポロにつく」ということを言い出しました。私たちはこのように偉大な人間を神様のようにしてしまうことがあります。しかし、それは間違いです。私たちは目に見えるものや、手で触れられるものにはばかり目をやりがちです。

しかし、秋の実りや紅葉を見ながら、季節の移り変わりをじっくりと思い返すならば確かに大地の実りや木々の種を蒔いたり、水を

注いだのは私たち人間かもしれませんが、それらをいつも見守り、成長させてくださったのは私たちの業ではなく、神様の御業であると実感します。まさに「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」という聖書の御言葉が響いてきませんか。

科学万能の社会に生きる私たちですが、私たちの思いや言葉や行いをはるかに超えた神様の大きな働きの中にこの世界があるということに深まりゆく秋、収穫を感謝するこの季節に心に留めて過ごしていきたいと思えます。(司祭 ステパノ 越山哲也)